



「剣道」という武道を 未来へ繋ぎたい

合資会社丸河河田剣道具店 代表社員 河田 規郎さん



岐阜市鞆屋(つつばや)町。ここは徳川の時代、長良川でとれた鮎を鮓に調製して江戸幕府へ献上する際のルート「御鮓街道」に沿い、すし屋や魚屋などが数々軒を連ねるとも賑わう城下町でした。

明治二十八年、剣道を嗜む初代の河田貫一さんがこの城下町に剣道員専門店を構えました。昭和二十九年に現在の屋号、合資会社丸河河田剣道具店と改め現在に至ります。

創業から百二十六年が経ち、今、剣道という武道は、さまざまな難局に直面しています。

そのなかで、五代目の河田規郎さんは、自身も愛する「剣道」という武道を絶やさぬよう、自らのできることを模索しながら、ひたむきな努力を重ねます。

ベビーブームで剣道人口急増

昭和四十六年から昭和四十九年頃の第二次ベビーブームと呼ばれた時代、多くの子どもたちの成長とともに習い事の種類も増え、各々の活動が盛んに行われていました。剣道もその一つで、道具の生産が国内だけでは追いつかず、海外で大量生産されるようになりました。

当時、河田剣道具店では、貫一さんの孫である寿恵子さんが三代目を受け継いでいましたが、跡継ぎがおらず、一緒に働いていた小島利春さんが四代目を託されました。

利春さんは、道具不足によって剣道に励む子ども達の志が絶たれぬようと、メーカーの剣道具生産工場が立ち上げられる際には台湾やフィリピンなど現地まで出掛け、軌道に乗るまで熱心に技術指導を重ねました。特に台湾には、日本の竹と似た良質な竹があり、早くから竹刀の生産拠点として展開されていたことから、足しげく通いました。今では剣道具全体の九割が海外生産にシフトされています。

その後、利春さんの実子である現在社長の規郎さんが河田家の養子となり、五代目を継いで今に至ります。

コロナ禍、少子化で剣道人口激減

しかし状況は一変してきます。第二次ベビーブーム以降、わが国では現在まで少子化が加速の一途を辿っています。

規郎さんが跡を継いだ令和二年十二月は、コロナ禍真っ只中。中学や高校、道場など、すべての剣道の活動場所が制限され、大会や昇段試験などあらゆる行事も中止となっていました。多くのスポーツができる限り「声を出さない」ような感染対策に取り組み中、発声と竹刀、体の動きが連動して一本となる剣道には、「発声」が欠かせず、剣士も指導者も対策に頭を抱える現状となりました。面の下にはマスクとフェイスガードが義務付けられ、大人は勿論、幼い子どもにとっても過酷な状況にあります。

そして、それは剣道具店の存続までも脅かす事態となっていきました。

伝え残したい職人技の剣道具を しかし…

職人の手によって作られた剣道具を身に着けることは、剣士にとってはステイタスといっても過言ではありません。素

材選び、縫い目一つひとつが気品のある美しさで仕立てられた道具は、まさに職人の技がなせる「逸品」です。しかし、他の伝統技術にもみられるように、高齢化、後継者不足といった現実には直面しています。

「海外の大量生産のおかげで、ここまで剣道が普及したのだと思っています。一方で、日本で培われた職人の技術や知恵を守り、大切に伝えていくことも私達がしていかなければならないことだと思っています」

しかし、職人の作る剣道具は大変高価で、竹刀一本にしても海外で大量生産されたものの十倍の値段がします。剣道人口が激減している中、高価な道具を使える剣士も数少なく、八方塞がりのような状況でもあるのです。

伝統技術を残したい。しかし、自分に何ができるのか…。暗中模索の日々が続きました。

先ずは、剣道人口を増やす そのために…

規郎さんが、導き出した答えは「剣道の裾野を広げる、剣道人口を増やすこと。剣道をもっと身近な存在にすること」でした。そのために、まず剣道の「金銭的負担が大きい」「剣道着の汚れや匂いが気になる」というイメージを変えることに取り組みようと考えました。

手掛けたのは誰もが始めやすいように「リーズナブルで、軽く、シンプルで使いやすい剣道具の開発」でした。お客様からの要望や提案、自身の考案など多くの声をもとに問屋やメーカーと話し合い、その開発に取り組みました。例えば、本来鹿皮や人工皮革でつくられている甲手は、洗うことにより型崩れや縮みが発生してしましますが、規郎さんは「丸洗いできる」という、画期的な甲手を誕生させました。また胴着や袴にはジャージ素材を使用し乾きやすくしわになりにくいな

剣士たちの拠り所となる店へ

規郎さんは、この商品開発を通じて、剣道の人口の垣根を

低くし、若い世代を増やしたいと考えました。そして、その先には本物の職人技で作られた美しい武具をまとった剣士たちが、一人でも多く増えていくことを思い描いています。

「若い剣士がやがて成長し、極めた者にはそれに合った相應しい道具が必要です。入り口はスポーツとしての剣道、その先は武道としての剣道へ繋がると信じています」

様々な要素が詰まっている剣道に、剣道具に携わる者としてどこまで寄り添えるか、日々鍛錬です。

「あらゆる年代の剣士たちの拠り所となる店であり続けたいと思っています。その方に合った剣道具をじっくりと話を聞きながら末永く使っていただけのように選んでいます」

守りたい、剣道は相手を敬う武道

剣道が更に多くの人に親しまれるスポーツとなるには五輪種目になることだと言われています。しかし、規郎さんはこれに異議を唱えます。

「剣道という武道の精神は、日本の伝統文化として醸成されてきました。試合では、相手を尊重し礼節を重んじることが勝敗よりも重要であるという考え方がなされます。五輪種目になると勝つことに重きを置くようになってしまっているのではないかと懸念しています」

小学生から始めた剣道は六段の腕前を持ち、今も道場で稽古に励んでおり、コロナ禍では中止になっていますが岐阜市内の剣道の大会、中体連やインターハイなどで審判員を務めるなど現役の剣士ならではの活動もしています。

「先代からは、自分の仕事に誇りを持つこと、そして一つひとつの仕事丁寧に行うことが大切と教えられてきました。すべて相手への尊重と礼節を重んじるということに繋がると思っています。『礼に始まり礼に終わる』この剣道の伝統が未来まで続いてほしいです」

合資会社丸河河田剣道具店

所在地 岐阜市鞆屋町33-3
TEL 058-262-7670
FAX 058-263-4421